『流着の思想』討論文(京都, 2015. 8. 27)

私たち、流れてきた者たち

高秉權

 1.

この本に対する書評を依頼され戸惑いを感じた。「沖縄」、この名を何度か聞いてみたことはあるが、とりあえず私にとってそこは、その歴史について一度も読んだこともなければ、訪ねてみたこともないところである。そのうえ、冨山さんがこの本で引用されたり言及されたりしたテキストの中には読んだこともないものも多かった。ゆえに、この本を読んで、ある考えを述べるということは、深刻な誤読と文脈喪失に対する危険を感受することでもある。

少し勇気を与えてくれたのは、副題に付けられた「沖縄問題」という言葉であった。私はこの言葉から「領土としての沖縄」ではなく、「脱領土化された沖縄」ということを考えさせられた。括弧を付けられた「沖縄問題」という言葉が、括弧付けられたままあたかも小さな「筏」のように見え、ある航海を経て私にひとつの「問題」として訪れてきたような感じだった。

もちろん、ここで「脱領土化された沖縄」という問題は、「沖縄」という固有名のもつ、ある特別かつ重要な「文脈」を失う危険をはらんでいる。それは看過すべきではないことを、再び強調しておきたい。にもかかわらず、「文脈喪失」は「もしかしたら」「文脈を乗り越えていく」ある冒険を可能にしてくれるのではなかろうかというふうにも考えられた。

「沖縄問題」、言いかえれば「問題としての沖縄」は、最近悩みはじめたあるテーマに介入し、何かを考えさせる。そして恐れずに言うならば、ある親しみを呼び起こしたりもする。物理的な場所、GPS上での場所として沖縄は一度も行ったこともない不慣れなところだが、問題としての沖縄、「問題的場所」、「問題である場所」としての沖縄は、かつて私が訪れたことのある－もっと正確に言うなら、私を訪れたことのある－、いやこれから私が訪れようとするある場所であり、ある地帯のように感じられる。

「沖縄」を離れてからでも存在する「沖縄問題」、もしかしたら「沖縄」を離れてのみ探ることができる「沖縄」、脱郷することとしてのみ、はじめて帰郷することになる場所、それを可能にする場所。そして「韓国」でも出会える、そうした「問題＝場所」としての「沖縄」があると考える(もちろんこの場合、私自身も「領土としての韓国」を離れなければならないことであろうが)。

この意味からすれば、「沖縄」はこの頃悩んでいる主題の名前でいうならば、まさしく「国境」である。「沖縄」はどこにあるのか。まず、沖縄は国境にあると、いや、『流着の思想』のどこかに書かれている言い方をするならば、「沖縄は丸ごと国境」であると述べたい。「国境」における生、それは、バーバの言い方を借りるなら「非＜故郷＝家＞の生(unhomely lives)」であるのだ。

しかしながら、「国境」を考えることは容易ではない。私たちは「国境」を地図に表示された‘国家と国家の間に引かれた境界線’とよく混同してしまうからである。国家の間に引かれた線としての国境は国家の中に存在する国境を思考させないし、なにより国境自体がひとつの時空間であるという点を考えさせない。

それはまるで生のある平面を折り入れて縫いでしまった縫合線のようだ。従って、「国境」を思考するためには国境をひとつの「面」として、それも至る所に遍在する生の一定の時空間として「確保」しなければならない。

以前韓国にたどり着いた脱北者たちが平均3～4年、長くて10年近くの時間を中国などで過ごすという報告書を読んだことがある。脱北者にとっては、韓国に着くまでの中国が丸ごと国境であるだろう。事実、はるかに多くの人々(ある推定によると、数万から数十万名に至るとされる)は韓国に来ることなく、そのまま中国で、主権の尋問に赤裸々に曝されたまま生きていく。そして国境を越えて韓国に辿り着いた場合も、相当数の人々は国境における生を生きていく。

かれらは、特別な数字ではじまる住民番号を付与されるがゆえに、この番号をみた韓国の企業や商店らは彼らの採用を忌避する。彼らは多様なところで、多様なかたちで、アイデンティティと身分に関して問い詰められる。尋問を受けるのだ。

去年観た映画『ムサン日記～白い犬』**監督：PARK Jung-bum、韓国、2010)**で、ある脱北者は韓国である程度の条件が整ったら、アメリカに行くと言ったりもした。

彼は国境を越え韓国に辿り着いたが、依然として国境を超える夢をみる。しかし、このように生きていくのが、じつは国境における生である。

先ほど脱北者にとって中国が丸ごと国境であると述べたが、ある未登録移住者にとって韓国が丸ごと国境であろう。

このように考えてみると国境は、事実上すべての領土で、すべての時間において存在するといえよう。すなわち、すべての領土はいつでも国境になるわけである。

同じ場所が領土であり得、国境でもあり得るということ。これは何を意味するのか。「沖縄問題」をとおして私は「領土」について、改めて考えさせられた。

領土とは時空間、大地に対するひとつの光学、ひとつの構え、あるいは態勢、私たちが「主権的－法的」と修飾し得るそうした光学であり、視覚であり、感覚であり、構えであるということだ(未だこういうふうにいろんな言葉で並べるしかないことをお許しいただきたい)。

だが、同一な時空間、同一な大地を異なる光学のもとで、異なる視点で、異なる準備態勢において生きてゆく人々、そのように生きなければならない人々がいる。

沖縄問題は「構えとしての領土」、「態勢としての領土」であるということ、また「構えとしての国境」、「態勢としての国境」が存在するということをみせてくれた。問題は「私たち」が自分の生の空間をいまどのように感覚しているかである。

こうしてみると、「領土としての沖縄」は、「沖縄問題」を思惟させない。「沖縄は日本の領土だ」と言ってしまえば、「沖縄問題」はみえなくなる。しかし私がここで暫定的に命名した「領土」とは別な構え、別な態勢、つまり「国境」として「沖縄」を語ることができるだろう。とするならば、こうした沖縄は「蘇鉄地獄」以降、故郷から離れなければならなかった沖縄人たちはもちろんのこと、いまこの瞬間においても故郷や国の喪失、すなわち植民地化された生を予感したり実感したりする人々の、またはさらに自分のくににいてさえ‘くにのない生’を生きる人々の、または追い出された生を生きる人々の時空間ではなかろうか。

２

再び沖縄はどこにあるのか、問いたい。これまで「問題としての沖縄」を国境から、あるいは国境としてみたとしたら、これからはこの本でよく表しているように、それが「身体」にあると述べたい。

抵抗としての沖縄、脱植民地闘争としての沖縄は、身体の中に入っていくのではなかろうか。ある筋肉の緊張感の中へ、ある冷汗の中へ。もちろんこの際、身体は肉体、いわば「筋肉」といえるだろうが、私はニーチェの用法通り、そしてニーチェが「戦場」と描写した身体、すなわち情動達といいたい。

私は「身体」を「精神」と対比される「肉体」としては考えていない。たとえそれがさまざまな身振りとして現されたとしてもである。

私にとって、身振りや表情は精神と対比されるというより、言葉、つまりロゴスと比較される。勿論、『流着の思想』をとおして「言葉を確保しようとする努力」がいかに重要なのかを学んだ。

また、そうした努力の中で私たちが通常使ってきた言葉たちが崩されるという経験がいかに重要なことなのかを悟った。

しかしながら、私はこの場で、そうした「言葉」、「ロゴス」以前の在るものの重要性を再び喚起しておきたい。この本で冨山さんが「言葉」を確保しようとしながら、また「言葉以前の在るもの」を確保しようとしているという印象を受けた。

「言葉以前の在るもの」をもうひとつの「ある言葉」と呼べると考える。ここでは、とりあえず、それを「言葉以前の言葉」と呼んでおく。

この本が描写している尋問の行われる場面をみよう。先ほど述べた国境、それは一方では国家の外であるが、法の効力が停止された戒厳状態がそうであるように、国家権力がさらに赤裸々に声を出すところでもある。ここでは国家権力の超法的な尋問が行われる。いつどこからでも自分が誰なのかを尋問されうる場所が国境であるし、またここで身体たちは帯電された粒子になる。

軍人の制服を見るだけで筋肉は緊張し、額には汗がにじむ。身体は何かしらを知っているのに違いない。緊張した筋肉と額ににじむ汗は身体の知が表現されたものであり、肉体的なかたちで発話された身体の言葉といえる。それは、概念以前に起こる情動(affect)の揺れであり(言葉以前の言葉)、精神の思惟以前に生じる身体の思惟であり(思惟以前の思惟)、身体が運動する以前に身体のなかで起きる運動である(運動以前の運動)。

冨山さんは「名詞的なもの」に対して「動詞的なこと」のもつ重要性を何度も強調した。序章でもご自身の文章に「動詞」を概念化したものが多くあるとした。しかし、私は、動き以前に行われる動き、換言するならば、動作で表現される以前に身体の中から行われる情動的高揚や激変について述べたい。

それは、ある動き、つまり変化であるが、ある移動であるというより、強度の変化である。動きとして表現される以前のある構え(準備態勢)、しかしそれは外見上では停止あるが、内面においては情動の変化、ある緊張である。

ここで、再び「言葉」と「動詞」について考えてみる。本来西洋語での「動詞(verb)」は「言葉(ラテン語, verbum)」を意味する。「言葉」を確保するということと「動詞」を確保することはある点においては同じ意味である。だが、私が思うに、この本で声化しようとするのは、ただ単に「言葉＝動詞」では、ない。

冨山さんはご自身の文章に「動詞」を概念化したことが多いと述べているが、私はこうして確保された言葉には「副詞(adverb)」が入っているような印象を受けた。それは「言葉に纏わりついた言葉(ad-verb)」であり、より厳密にいえば、言葉(副詞)がそこ(動詞)に纏わりついたそのような言葉(「言葉の存在論的身体性」)であるからだ。昨日冨山さんの歓迎の辞のなかで印象深かったのは、中井正一が述べたという「言葉の姿」という言い方である。

「集団は新たな言葉の姿を求めている」というとき、この「言葉の姿」という言い方に深い示唆を与えた。言葉の意味とは違う言葉の姿ということ。言葉に纏わりついて言葉にある色を付与するもの、言葉に纏わりついているもの、もっと正確にはいえば「言葉がそこに纏わりついているそういう言葉」、私はこれを「副詞的」と感じた。動詞は副詞と共にある。副詞が文章に明示的には書かれていないとしても、全ての「動詞」には「副詞」が付いている、あるいは「動詞」たちは、見えない、ある「副詞」に付いた言葉たちであると考える。

この本で、冨山さんは、じつは、それを汲み取っているという印象を受けた。動詞を確保しながら、また副詞を確保しているし、言葉を確保しつつ「言葉以前の言葉」をも確保していると感じたのだ。ある沖縄人が立派な日本人として生きていこうと決意するなかで流す冷汗や握りしめた拳から冨山さんはそれを見ているようである。

植民地化された生を予定された運命として受け入れるしかないときでさえ、身体は冷汗と緊張された筋肉のかたちで、闘いは未だ終っていないということを語るからである。ある違和を表出しつつ、身体は絶えずいまここが「故郷ではないと」、「くにではないと」語る。

身体のかかる言葉はニーチェが「到来する」哲学者の言葉として考えた「もしかしたら(vielleicht)」という副詞、すなわち「根拠の根拠なさ」を疑うその「不穏な」仮定と予感の副詞を想起させる。ある「不可能性」として提示された現実を否定する、そして「不可能性」を再び「可能性」の場に引き下ろす、いいかえれば闘いの場所、政治の場、思惟の場所を確保させるその副詞を思い起こさせるのだ。

事実私にこの言葉をこの場で思い出してくれたのは『善悪の彼岸』でのニーチェでなければ、ニーチェの言葉に註釈を付けた「友情の政治学(Politics of Friendship)」のデリダでもない。

私はこの言葉の重要性を先日まで哲学講座を担当したある夜学で悟った。そこで出会ったひとりの「障がい」者がこれまで不可能であろうと考えたこと、社会が「障がい」者に暗黙のうちに受け入れることを強要したある不可能さとしての現実が、じつはそうでもないかもしれないということを知ったとき、可能か不可能かを分ける基準、現実の道徳的律法を疑うようになって初めて声に出した言葉が「もしかしたら」であった。

その声がいかに低かったとしても、それはある新たな始まりを知らせる重大な合図である。それはこれまでを支配してきた情動の体制に亀裂が生じたことを見せてくれるからである。

現在とは異なる歴史の可能性を予め排除する不可能性の前で、疑いと問いの場所を確保することは極めて重要である。この場所が抵抗と覚醒、政治と思惟の場所であるからであり、またこの場所が未来を差し戻すこと、未来へ帰郷することを可能にするからである。まさにここが沖縄だ。私はそういうふうに読んだ。

訳・文責　鄭柚鎮

二次訳・共同作業　古波蔵契